

若年層サッカーチームの育成強化と普及に向けての課題

The subject towards training strengthening and spread of youth soccer teams

1K03B094-1 氏名 佐藤大介

指導教員 主査 堀野博幸 先生 副査 石井昌幸 先生

(I)序論

2006 年 FIFA ワールドカップドイツ大会において、日本代表はグループリーグで姿を消した。近年の日本サッカーには、J リーグ開幕以降に見せた発展の勢いは無い。

現在、JFA では、「10 年以内に世界トップ 10 を目指す」という大目標を実現するために、従来から掲げている「三位一体の強化策」〔代表強化、ユース（若年層）強化、指導者養成〕に普及をプラスした。サッカーの幅広い普及により、サッカー基盤を広げ、その基盤においてユース（若年層）強化を進めていくということが、日本代表の強化につながっていくという理念である。

この「三位一体の強化策＋普及策」の理念から考えれば、サッカーの普及率を上げるための施策、そしてユース（若年層）強化の最前線を担っている各年代のサッカーチームの現状が不十分である、もしくは何らかの問題があるため、日本サッカーが伸び悩んでいると推察できる。

このようなことから、若年層の各年代（小、中、高）におけるサッカー普及率や、全国のサッカーチームの現状を比較検討することは、今後、JFA が掲げる「三位一体の強化策＋普及策」の目的を満たし、日本代表が世界のトップ 10 に入っていけるような具体的な施策、育成強化の最前線を担っている若年層サッカーチームのあり方に関して、何らかの方向性を見出すことができるのではないかと考えられる。この研究を通して、今後の若年層の各年代のサッカーの普及、育成強化に繋がるサッカーチームのあり方について検討していきたい。

(II)調査 1

調査 1 として、若年層の各年代における現在の JFA 加盟チーム数と選手数、過去における推移、そして JFA 加盟とは何かを JFA のホームページから調査した。結果、サッカー普及率は年々上がっているが、年代があがるにつれて加盟チーム数が減っていくことが明らかになり、サッカーがしたいのにする場がない、自分に合ったチームがないために自分の意志に反してサッカーを辞めてしまうという選手が存在しているという状況が推察された。そして、その状況を改善し、JFA 加盟チーム数を増やすことで、選手数を増やすことがユース（若年層）強化に繋がると考察された。

(III)調査 2

調査 2 として、各年代における育成強化の最前線を担っているサッカーチームを統括している全国レベルの下部組織、チーム数、選手数等の現状と過去の推移を各下部組織のホームページや電話調査などから把握した。結果、現在の部活動チームが主流である状況が育成強化や普及を妨げる一つの要因だと考えられた。また、年代別にサッカーチームを統括している下部組織が異なり、多くの選手が小、中、高とサッカー環境が変化するという現状が一貫指導の妨げになっているということが考えられ、進学によるサッカー環境の変化によって生まれる問題を改善していくことが重要であると考察された。そして、日本クラブユースサッカー連盟（JCY）が統括するクラブチームか、全国高等学校体育連盟（全国高体連）、日本中学校体育連盟（日本中体連）が統括する部活動チームのどちらかにしか加盟登録できず、公式大会への出場機会が限られるという二重登録問題も明らかになった。

(IV)総合考察

育成強化や普及を妨げている大きな原因は、自分に合っていないチームに所属してしまった場合、チームを変えるという現状選択肢が無いという現在の日本のサッカー環境だと考えられる。とりわけ部活動チームにおいてこの傾向は強い。このような考えから、チームを自分で選ぶことができ、変更することも比較的容易であるクラブチームを増やしていくことが状況改善のための有効な策であると考えられる。それには、サッカー環境がどの年代よりも整っている第 4 種の「地域クラブ」の発展により、中学生、高校生の受け皿にもなる「発展型の地域クラブチーム」の誕生が望まれる。そして、若年層サッカーチーム全てを統括する下部組織による一貫指導も将来的には望まれる。これによって二重登録問題などは解決される。

(V). まとめ

本研究から、育成強化、普及を考える上では、将来的には現在の第 4 種の地域クラブチームを基盤として発展させ、小学校から高校までの選手たちの受け皿になるようなクラブ、いわば「発展型の地域のクラブチーム」を増やしていくことが有効な策であると考えられた。